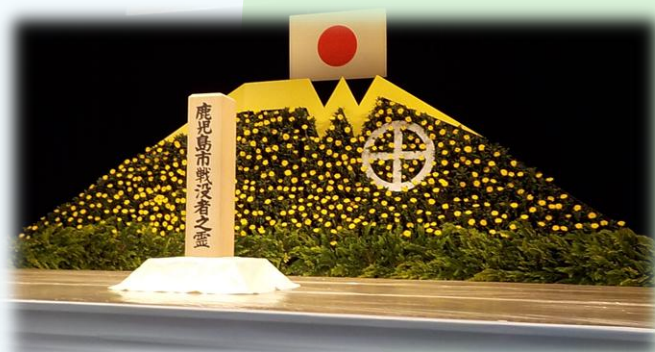


令和8年度 鹿児島市戦没者追悼・平和祈念式 会次第

- 1 開式のことば
- 2 一同拝礼
- 3 国家斉唱
- 4 黙とう
- 5 追悼のことば
 - ・鹿児島市長 下鶴 隆央
 - ・鹿児島市議会議長 古江 尚子 様
 - ・遺族代表
 - ～喜入地区遺族会長 松原 勝義 様～
 - ・小学生代表
 - ～吉田小学校 山下 心大朗 さん～
 - ・中学生代表
 - ～吉田北中学校 松山 初花 さん～
- 6 献花
 - ・代表献花
 - ・一般献花
- 7 式電披露
- 8 一同拝礼
- 9 閉式のことば



目次

・本市における戦災の状況	P1
・戦争遺児の体験談「七十歳で父と呼ばれた日」	P2-5
・鹿児島市平和都市宣言	P6
・第二次世界大戦敵味方戦亡者慰霊碑	P7
・平和に関する取り組み	P8-9

本市における戦災の状況

◆ 空襲の概況

太平洋戦争において、鹿児島市では、1945年3月18日から8月6日まで合計8回にわたって空襲を受けた。1945年3月から本土への空襲は本格化した。沖繩への米軍上陸以降、次の上陸地点として終戦まで単なる補給地、内地ではなく「戦場」と化した。

計8回の空襲で市内は焼け野原と化し、市が受けた被害は、実に死者3,329人、負傷者4,633人、行方不明35人、その他10万7,388人、合計11万5,385人に達した。その総数は1945年初期の疎開後の人口17万5,000人に対し66%であった。建物の罹災数は全戸数2万1,961戸で、3万8,760戸に対し57%であった。全市は文字どおり灰燼※に帰し、市街地の約93%、327万坪（1,079万平方メートル）を焼失した。 ※跡形もなくすっかり焼ける



(撮影：平岡正三郎氏)

◆ 戦時中の市民生活の状況

1943年に入ってから市民は三度の食事さえ満足にできず、配給だけでは生きてはいけない状態となり、それぞれ自衛的に自給自足体制をとり始め、空き地という空き地は手当たり次第畑になっていった。それでも食べ盛りの子供たちは慢性的な栄養失調状態になっていた。

(撮影：平岡正三郎氏)



町内会・隣保班という末端組織ができてから、防空訓練が連日のように行われた。家の前に防火水槽や火消し棒、バケツが置かれ、サイレンを合図に主婦たちが飛び出し、水をかけ、火消し棒でたたき消す訓練である。爆弾落下時に地面にはいつくばり、なるべく低い姿勢をとる訓練も行われた。

親指で耳を、4本の指で両眼を覆うと同時に伏せるのである。しかしこれらの訓練は、1945年に入ってから市に対する米軍機の本格的空襲の前にはほとんど役立たずであった。

戦争への総動員体制は子供たちの上にも容赦なく降りかかった。県立一中、二中、市立中学、鹿児島中学の4、5年生が愛知県の飛行機工場へ動員され、少ない食糧におなかをすかしながら組み立て作業に携わったほか、七高生が長崎へ、また女学校の生徒たちも県内外に動員されて、戦場へ出た若い工員たちの留守を補った。

一方、沖繩に続き、本土上陸が予想された1945年初め、南西諸島方面から本土鹿児島県の農村地帯へ学童が集団で疎開した。また空襲が激しくなるにつれ市内の学童もそれぞれ親戚、知人を頼って田舎へ疎開した。勉強どころではなかった。食べ盛りなのに食糧は配給量も維持できなかった。

「鹿児島市戦災復興誌」より抜粋

「七十歳で父と呼ばれた日」

「世代間で共有する戦争遺児の体験談」

令和5年度 鹿児島大学
進取の精神チャレンジプログラム 一般部門企画

発行日/令和6年1月25日
発行/鹿児島大学 理学部 中川研究室
編集/ 渡邊良介、坂本直也、松尾たま希



「戦争を語り継ぐ遺児の会」代表 吉見文一さん

私は昭和16年の生まれなんです。戦争が昭和16年に始まって、うちの両親は、父が28歳、母が21歳で結婚しております。結婚生活は4年間です。そのうち一緒に住んでいたのが2年間なんです。その時、私は生まれました。父と母と3人で生活したのは生後6ヶ月までです。全く私は父親の顔を覚えていない。その後、母は再婚せず、大変苦勞しながら私を育ててくれました。そういったことを思い起こしてしまうから、戦争というのは、戦争に行った本人も大変ですけど、残された家族、周りの人は、本当に大変なんです。その体験を語り継いでいけたらなと思って、この遺児の会を立ち上げました。



◆ 父の最期の地を訪問

父は32歳で戦死、その後母は女手一つで私を育ててくれました。父は戦死しました。結婚していました。そのおかげで私は生まれたのです。父の弟、叔父は独身で戦死しています。結婚する機会にも恵まれず、生まれてくるはずの命にも恵まれなかったのです。これが戦争なんです。東部ニューギニアの戦いは、1943年3月に始まって、大変な戦いであったのです。その1943年、8月17日、敵軍がニューギニアのラエ、サラモアを攻撃し

ているんです。その最初の攻撃の日に父親は戦死しているのです。

東京からニューギニアの空港があるポートモレスビーというところまで約5,000キロあります。成田空港から約6時間半で行きます。非常に未開発のところが多いところです。今もですね場所によっては電気ガス水道がなくて、自給自足で暮らしています。観光客はあまりいません。治安も悪いです。このラエというところがちょうどニューギニア戦争の戦闘が激しかったところです。そこで1943年8月17日の未明、父親は戦死しています。ニューギニアにて父親を失った人たちが友好親善でニューギニアを訪問しました。そこではお互い父親を知らない人ばかりなんです。父親が亡くなったであろう海を眺めて父親へ語りかけていくのです。現地の人と協力して父の最期の地、ラエで祭壇を作りました。地元の人とも一生懸命で、私は鹿児島から鹿児島のおいしい水とお菓子とお酒を持っていきました。ここで父親に初めて語りかけたのです。父親と面と向かって話したことはないし、そして父親は私がどういうふうに今まで生活してきたってことは全く知らないのですから、それを報告しました。

◆ 帰ってきた父の遺留品

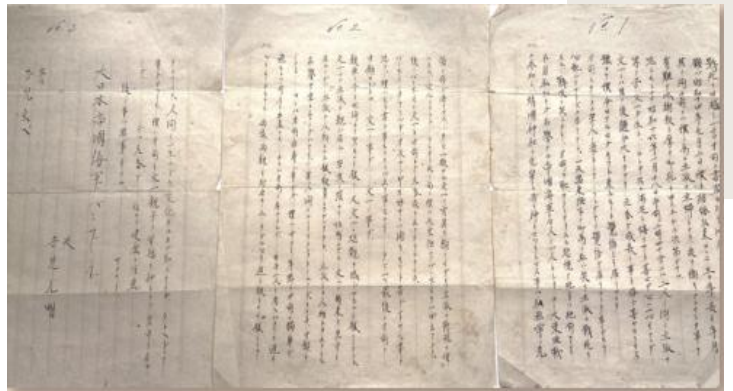
これがですね、なんと、最期まで父親がこの写真を持って戦死したんです。この写真や遺留品が遺骨と一緒に私の母の手元に帰ってきたのです。戦時中こういった遺留品が遺族のもとに帰ってくることがまずほとんどないと思います。たまたまこれがあったのです。それと戦地から、父親が亡くなった最期の様子を記した手紙が父の上官から送られてきました。このような本人が亡くなったことを知らせる手紙なんていうのもほとんどないわけです。

遺留品の中で、母への遺書を紹介します。



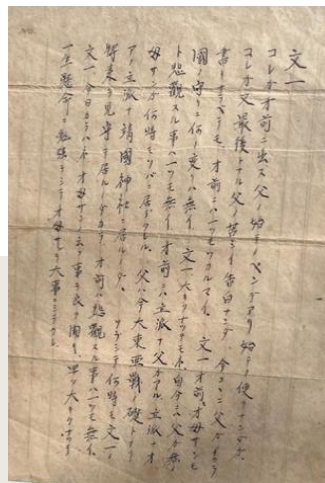
「妻、玄へ
戦死を見越し一言お前に書き置きを以て御礼方々御願
いをする。顧みれば昭和十四年九月二日、僕と結婚以
来二、三カ年長い年月、其の間お前には僕のために立
派な主婦となり、働きくれました事を有難く感謝致し
厚く御礼を申し上げる次第である。（中略）

ただ一つ最期にお前をお願いをする。文一の事だ。文一の事だ。親無し子と世
間から笑わせない様に、また文一に悲観を感じさせない様にしてくれ。文一には
立派な親は居る。草菜の陰より何
時まで文一の将来を見守って居
るのだ。立派な人物になる様教育
してやってくれ。（中略）



これはお前自身の事だが、僕は今
から年若いお前に独身で通せとは
命令できない。これはお前の考え
であるが、自分一人の考えを通す
べきものでもない。両家両親と打
合せの上たどるべき道を謝らない
ようにしてくれないか。

人間の一生はどう変化するかは知らないが、たとえどんな事があっても僕はお
前と文一親子の幸福を神となり見守って居るのだ。では元気で。何より健康に注
意。あとの事は万事頼む。」



こういった便りが来た。だから、母はこのことを胸に秘めて、
必死になって私を育てたのではないかと思う。

◆ 語り継ぐ会の立ち上げ

私は高校の教員を40年近くやってましたが、生徒に向かっ
て戦争の話をして1回もしたことがない。父親が戦死したことを1回
も言ったことはないんです。しかし、私たちが戦争のことを語
り伝えなければ、継ぐ人がいないんです。私たちが最後なん
です。今日、講師の人が3名います。私が最年少なんです。よ
うだから私より後の後輩で、戦争のことあまり知る人が少ない。

だったら、戦争のことは私たちが語り継いでいかなければ風化してしまうと考えた。自分の孫、子供にも戦争の話をしたことはない。それと同じように、母親も祖父母も戦争の話を私にしたことはないのです。だから私は父親の話を聞いたことはないのです。それだけ奥が深い。私たち遺族も非常に高齢になりました。どうにかしてこれを語り継いでいかなきゃならないと思いまして。そしたらですね、当時中学3年の孫がですね。知覧にあります、特攻平和会館が主催する「平和へのメッセージ from 知覧スピーチコンテスト」というのに応募して、優秀賞に選ばれたのです。それを紹介します。



「初めて父と呼べた日」

「お父さん」このたった、五文字は、私の祖父にとって、言いたくても言えなかった大切な言葉です。私の曾祖父、つまり私の祖父のお父さんは祖父がまだ二歳の頃に、海軍として、パプアニューギニアに行きました。残されたのは、二歳の幼い祖父と、強く優しい曾祖母との二人でした。(中略)私の祖父は、父親が戦死した東部ニューギニアに行きました。同じ戦争遺児らとともに慰霊参拝に行ったのです。そこでは、現地の子どもたちが、嬉しそうに「ようこそ、こんにちわ」と話しかけてきてくれたと言います。そして案内されたのは目の前に、青く、大きな海が見える小さな丘でした。そっと手を合わせる祖父。そして、父親の戦死した海に向かって、

「お父さん」

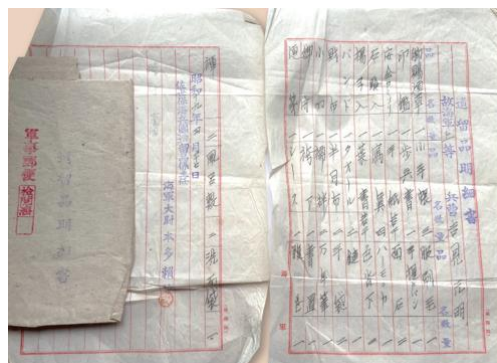
そう叫びました。このたった五文字を、私の祖父は、ずっと言えなかったのです。その日は、祖父にとって、七十歳にして初めて「お父さん」と呼べた日となりました。私が毎日、なにげなく口にするこの言葉に反応してくれる存在がいる事、そのありがたさに、気付かされました。

私たちがこうして毎日学校に行けて、勉強ができる。このとても幸せな事に感謝します。今を生きる私たちがすべきことは、戦争という恐ろしいことを二度と繰り返さない様にすること、そして戦争で戦った方々に心から感謝の気持ちを忘れないことだと思います。私の曾祖父のように、尊い命を沢山奪った戦争。この犠牲を一つも無駄にしない方がいいけません。「大切な人」と「大切な場所」と。幸せなこの世界が、もっと、永遠に、平和であることを、願っています。」



ラエ（ルナマンの丘）で作った祭壇

私は孫に背中を押されたのです。やはり私ができることは、自分の経験したことを次の代へ繋いでいくことだと思ったのです。話せば若い人はわかってくれるんだってことを、孫から背中を押されて、戦争を語り継ぐ遺児の会を立ち上げて今やってるわけです。それに賛同する方が十何名いらっしゃいます。その方が今日、そのうちのあと二人、そしてまた座談会でお話してくれる二人と皆さんが協力してくれます。どうか皆さん、これを機会に戦争というのを、そして家族がいて、お父さんがいて、一緒に食事をできる。ごくごく当たり前の家庭じゃないですか。ごくごく当たり前のありがたさ、当たり前に感謝する気持ちをぜひお互いに持っていきたいなあと考えてるわけです。今平和で、皆さんがこの場に來れること。そうやって、すごく当たり前だけど、すごいありがたいこと。感謝すべきことなんです、それが平和な命の大切さ、尊さ、平和の大切さを、ぜひ一緒になって考えて、語り継いでいけたらなあと考えております。



◆ 日章旗

これがですね、戦争に行く人たちに近所、親戚が最後に寄せ書きをしているのです。これを持って、戦争で肌身離さず戦っているのです。これをアメリカのニューヨークに在住するジェームズさんという人が持っていたのです。その子供さんがこの日章旗を引き継いで、これをどうしても持ち主の信井成章さんに返したいという希望があり、その依頼が日本の遺族会にきました。

信井さんには弟がいて、その弟の娘さんが京都の宇治市にいたんです。それを私の教え子が探してくれて、その娘さんが受け取るってことで、日章旗は遺族の元に帰ることができました。私が生徒の皆さんに見せたいから写真を送ってくれないかと依頼すると、「いや、どうぞ講演で使ってください、その方が叔父の供養になります。」ということで預かっているのです。ぜひ皆さん、見てあげてください。



鹿児島市平和都市宣言

鹿児島市は、昔の戦争で、街のほとんどが燃え、多くの人亡くなりました。そうした辛いことがあっても、鹿児島市の人々は立ち上がり、みんなの力でまちをつくり直しました。そのおかげで、今のみんなが暮らす鹿児島市のまちがあります。わたしたちは、この平和で豊かな鹿児島市を守り、再び戦争を繰り返さないことを誓い、世界の平和を願って、「平和都市」を宣言しています。

わたくしたちの郷土鹿児島市は、先の大戦により市街地のほとんどを焼失し、多くの尊い人命と財産を失った。

鹿児島市は、その焦土の中から立ち上がり市民の英知とたゆまぬ努力によって、今日、南九州の中核都市として限らない発展を続けている。

わたくしたちは、この平和で豊かな郷土を次の世代に引き継ぐために、再び戦争による惨禍を繰り返さないことを誓い、あらゆる国の核兵器の全面廃絶と国是である非核三原則の遵守を希求し、世界の恒久平和の達成を願い、ここに「平和都市」を宣言する。

平成2年2月26日 鹿児島市



「私の描く平和 世界へ広がれ」

平和都市宣言35周年 絵画の部

最優秀賞作品

星峯中学校1年 高橋 琴美 さん(令和7年度)

第二次世界大戦敵味方戦亡者慰霊碑



慰霊碑の建立・由来

第二次世界大戦敵味方戦亡者慰霊碑は、昭和28年12月、大戦で亡くなられた世界中の方々を悼むとともに、二度とこのような惨事が起こらないことを祈念するため、第14代 勝目 清 鹿児島市長により建立されました。

当時は中央公園に建てられましたが、その後、地下駐車場建設に伴い、現在の城山公園内探勝園に移設されました。

第二次世界大戦敵味方戦亡者慰霊碑
(探勝園)

「第二次世界大戦敵味方戦亡者慰霊碑」建立の趣旨

第二次世界大戦では、世界中で二千数百万人の生命が失われたようです。

その霊をなぐさめるとともに再びかかる惨事が起こらないようにと思ってこの碑を建てました。

旧薩摩藩主島津義弘は朝鮮での戦争で亡くなった、敵味方の人々のため慶長4年高野山に供養碑を造りました。

これは日本における赤十字精神の見本として世界各国に有名であります。此処に造った碑は、前記の供養碑と同じ形、同じ大きさであります。

昭和28年12月25日 鹿児島市長 勝目 清



慰霊碑横の石碑



市長慰霊のことば(終戦の日)

第二次世界大戦戦亡者慰霊祭(令和7年度)



平和に関する取り組み

① 太平洋戦争民間犠牲者慰霊碑『人間之碑』への献花

太平洋戦争において、本市では、昭和20年3月18日から8月6日まで合計8回にわたって空襲を受けており、中でも6月17日は死者2,316人を数える最も多くの犠牲者が出ました。最も大きな被害を受けたこの日に犠牲者の慰霊を申し上げるとともに、戦争の悲惨さと平和の尊さを再認識していただくため、献花を行っております。



② 第二次世界大戦敵味方戦亡者慰霊碑への献花



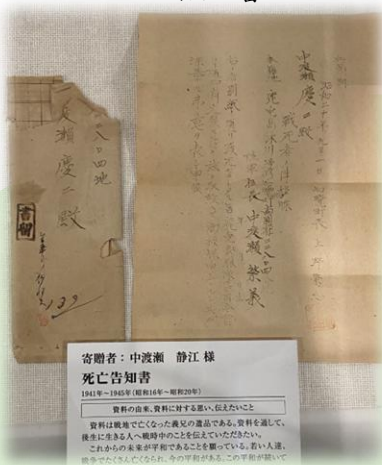
終戦の日である8月15日は、第二次世界大戦敵味方戦亡者慰霊碑へ、献花を行いました。



③ 戦災と復興資料・写真展

本市では、平和の尊さや戦争の悲惨さ、復興のための先人の努力を、改めて、多くの市民の方々に知っていただくため、毎年戦災と復興資料・写真展を開催しており、空襲で焼失した鹿児島市街地の写真や戦災復興工事の写真などを展示しております。
(下記画像は寄贈いただいた戦災復興資料)

死亡告知書



軍隊で使用した水筒



資料展示の様子



世の中すべて便利になったが、「幸せだから感謝する」ではなく「感謝できることが幸せである」と思っている。戦争で犠牲になった人たちのことを思いながら、日々平和であることに感謝して生きてほしい。
(資料寄贈者からのメッセージ)

④ 平和に関する標語の募集

「鹿児島市平和都市宣言」の啓発のため、毎年、市内の小学5・6年生と中学生から平和に関する標語を募集しています。

令和7年度は平和都市宣言35周年を記念し、例年の標語に加え、作文及び絵画を募集したところ、13,171点にのぼる多くの作品が寄せられました。

その中から標語・作文の部の最優秀賞作品を紹介します。(ポスター作品はP6に掲載)



標語

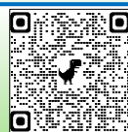
無力じゃない 僕らの発信 未来へと

天保山中学校2年 相生 駿太 さん(令和7年度)

作文

『目の前の奇跡』

鴨池中学校3年 松野 真依 さん(令和7年度)



その他受賞作品はこちら

⑤ 平和都市宣言35周年・戦後80年記念事業

「鹿児島市平和都市宣言」から35周年、戦後80年の節目の年であった令和7年度には、平和を尊ぶ心が育まれ、次世代に継承されるよう、記念事業として、「ヒロシマ平和学習派遣事業」及び「『ナガサキ原爆展』と『鹿児島市の戦災と復興資料・写真展』」を開催しました。



◆ ヒロシマ平和学習派遣事業

鹿児島市内の中学生10人を広島市に派遣し、平和記念式典参列、平和学習の集いへの参加、平和関連施設見学などをおして平和について考え学んでもらい、派遣報告として、令和7年8月11日に市中央公民館において開催された「『ナガサキ原爆展』と『鹿児島市の戦災と復興資料・写真展』」オープニングセレモニーの中で発表してもらいました。



◆ 「ナガサキ原爆展」と「鹿児島市の戦災と復興資料・写真展」

長崎の原爆被爆資料や、本市の空襲被害状況の写真等を展示する「ナガサキ原爆展」と「鹿児島市の戦災と復興資料・写真展」を開催しました。

